九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『長生殿』訳注(三)

竹村, 則行
九州大学文学部 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9642

出版情報：中国文学論集. 28, pp.151-168, 1999-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『長生殿』訳注（三）

竹村則行

凡例

一　『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『暈刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。

二　本訳注に当って、出典の確認や本文の解釈等において、以下の諸書を参照したが、訳注の際には、これを一々明示していない。

塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）
徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
曾永義『中国古典戯劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
蔡運長『長生殿通俗註釈』（雲南人民出版社、一九八七年）

三　本訳注では、主に前記参考書に於てなお未注の故事出拠について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行共著『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年刊）を参照されたい。

四　**【曲牌名】**に続く「唱」部分の訳出は、この間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、**【ゴチック文字】**の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、及び唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五　訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六　訳文は、**【ゴチック文字】**で示される「唱」部分の訳出も含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となる様に留意した。（「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。）それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚ない御指教をお願いする次第である。

七　前稿「『長生殿』訳注（一）（二）」は、『中国文学論集』二十六～二十七（一九九七～九八年）に訳載した。

八　本訳注（三）（第八～十一齣）は、一九九六年十月～九七年五月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、担当の竹村が浄書した。この間の演習に参加した助手・院生・研究生は次の通りである。

岡村真寿美・若杉邦子・諸田龍美・胡　山林・野田雄史・黄　冬柏・呉　紅華
角田美和・王　展・蕭　燕婉・王　毓雯・垣見美樹香・河野真人

第八齣　献髪

（副浄が急いで登場）「天に予期せぬ嵐がある様に、人にも遽かに災難が降りかかる。[1]」私は楊国忠、妹が貴妃に冊立されて以来、権勢は日に盛んです。ところが今朝、思いがけなく貴妃が玉旨に忤い（さからい）、宮中を放逐され、高内監に命じて、車一つでこの門まで送られたとのこと。[2]一体どういう事だろう？　全くの驚きです。ともあれ門前に貴妃を貴妃を迎えに行こう。（一旦退場）（丑が車に乗った旦を連れて登場）

【仙呂過曲】【望吾郷】【天子の御心は定め無く、曾ての恩愛もどこへやら。蛾眉の美人が急に貶謫の憂き目を見たが、その内実を知ろうにも、どう仕様もない。棄てられ方の何と一方的なこと。今や私は長門宮や永巷に幽閉されたも同然。宮中を顧みれば、つのる愁いが抑え難い。】

（副浄が登場し、跪いて出迎える介）臣楊国忠が貴妃様をお迎えに上りました。（丑）丞相殿、早く貴妃様を奥へ。我輩は少し話があります。（副浄）者ども、侍女に命じて貴妃様を奥の堂へお連れしろ。（侍女が登場し、旦が車から下りるの

を助け、擁えて退場）（副浄が丑に礼をする介）高老公様、お坐り下さい。これは一体どうした事です？（丑）貴妃様は、【一封書】【君子の寵愛が最も篤く、後宮では専ら彼女が御寝を一人占め。】ところが昨日は、【思いもかけず御心に忤き、にわかに商星と参星の様に仲違いされた。】丞相殿、我輩の多弁をおとがめなさるな。貴妃様は、【生来のわがままが習い性となり、天子の御寝に侍る他の美人の事で疑念を抱かれたのです。】（副浄）貶謫された今、どうすればよいでしょう。（丑）丞相殿はまず朝廷へ謝罪に行き、解決の機を窺うようにするのがよいでしょう。（副浄）高老公よ、【全てはあなたに頼って天子に進上し、天子の了解を得たく思います。】（丑）それは当然です。（合唱）【必ずや再び宮中の花（楊貴妃）を宮殿に呼び戻しましょう。】

（丑）ではこれで。（副浄）私もお供します。（内に向っていう介）侍女ども、貴妃様によくお仕えするのだぞ。（内で応ずる介）（副浄）「これじゃ烏と鵲が群れ飛ぶようなもの、吉凶の見当もつかぬ。[3]」（丑と共に退場）（旦が侍女を連れて登場）

【中呂引子】【行香子】【にわかに宮門を出され、動揺する心がまだ落着かぬ。愁いに満ちた顔中に涙のあと。この間の心中の悩みは、とても言葉に尽くせない。ただ花のかんばせを惜しみ、身の薄命を憐れみ、深い天恩を思うだけ。】

「君恩は行く川のように東へと流れ去り、君寵を得ればその心移りを憂い、寵を失えば愁いに沈む。宴席で《梅花落》など演奏なさるまいぞ。宮殿の西にはもう涼しい秋風が吹いているのだから。」私楊玉環は、宮中に入って以来、身に余る天子の寵愛を蒙りました。君心は十分に托すべきであり、歓楽はいつまでも続くものと思っていました。ところが運命は予想もつかず、一朝天子の怒りに触れ、宮車に乗って楊国忠の私邸へ帰される事になりました。宮門を一歩出れば、まるで九重の天を隔てたかの様。（涙する介）天よ、宮中の明月はもう私を照らすことはないでしょう。御苑の落花は再び枝について開花する望みも絶たれました。私は胸に手を当てて自らの薄命を悼み、袂で顔を掩って空しく嘆きます。何と傷ましくやるせないこと。

【中呂過曲】【榴花泣】【石榴花】【薄絹の衣を払えば、まだ残る天子様の香り。私は以前の天恩をどこに感謝すればよいのか。思えば春の行楽には朝から晩まで天子にお供したのに、【泣顔回】一体どうして雲雨が切れるように二人の情愛が中断してしまったのか。私が甘えてすねて見せれば、天子様はこれまで何でも聞いて下さったのに、思いがけず横しまに伸びて来た枝（虢国夫人）の為に、連理の枝がにわかに切断されようとしている。】

『長生殿』訳注（三）（竹村）

侍女よ、ここらにどこか宮中が見える所は無いか？（侍女）前方の御書楼の上から西北を見やれば、宮壁でございます。（旦）私について上までいらっしゃい。（侍女）かしこまりました。（旦が楼に上る介）「西宮は遥かに見えず、一たび楼に上れば断腸の思い。」（侍女が指さす介）貴妃様、この一帯の黄色い琉璃瓦は、九重の宮殿ではございませんか？（旦が涙する介をする）

【前腔】【高楼に上って涙を流し、遥かに宮城の門を眺めると、僅かの間に紅雲[4]に隔てられている。昨夜は宮中の寵姫であったものを、再び天子の恩情に浴するを願うばかり。ああ、天命はむごいもの。この身が白髪になる前に、君恩を先に涸らしてしまうとは。】（侍女が指さす介）おや、向うから太監が馬に乗って来るのが見えます。きっと貴妃様をお召しなのでしょう。（旦が嘆く介）**【恐らく天子様の吉祥のお召しではなく、多分凶兆の知らせなのでしょう。】**（旦が楼を下りる介）（丑が登場）「密かに昔を懐かしむ心情を、恩寵を失った人に報告します。[5]」（会う介）高力士が貴妃様にお目通りします。（旦）高力士、どんな用件なの？（丑）私め、ただ今奏上致しましたところ、天子様には貴妃様の御帰館の様子を詳しくお尋ねになり、後悔されている御様子でした。ただ今、天子様は独り宮中に居られ、しきりに嘆息されていますが、きっと貴妃様を思われてのこと。そこで私めが特にお知らせに参ったのです。（旦）ああ、どこにまだ私を思っていらっしゃるものですか。（丑）愚かな私めは賢妃をお諫めできませんが、貴妃様にはあまり意地を張られぬが良いかと存じます。もし何か適当な品物がございましたら、私めにお渡し下さい。折を見て天子に進上致せば、或いは御心を動かすことができるやも知れません。（旦）高力士、お前はどんな物を献上するのが良いというのか。（考える介）

【喜漁灯犯】【喜漁灯】【思えばどんな物が真情を伝えて、君王を感動させるであろう？】思うに、私のこの一身以外は、みんな君王から下賜されたもの。**【ただ愁いの涙が幾筋も真珠のように流れても、これを金絲で編んで美しい盤に載せて天子に進上することはできない。】**おお、そうだ。**【剔銀灯】【この一筋の艶ある黒髪は、曾て君王に添い寝した折に、御前で鏡に向って梳いてみせたもの。】**侍女よ、鏡台と鋏を持って来ておくれ。（侍女が応じて取って差し出す介）（旦が髪を解く介）ああ、髪よ、髪よ。**【漁家傲】【私の青春の道連れであったお前を剪ってしまうのは忍び難いが、今はただ私の衷心を表わすために、】**（髪を剪る介をする）**【剪り落して、自ら憐れむのみ。】**（髪を手に取って起ち、泣く

介）髪よ、髪よ。【喜漁灯】【私の天子への懇ろな気持ちを、全てお前に托してしまおう。】（拝する介）我が聖なる天子よ、【我が身は、この乱れた髪のよう、これこそ私の未練の思いなのです。】

（起つ介）高力士よ、お前はこれを持って天子に申し上げておくれ。（泣く介）私の罪は万死に当り、今生において再び天顔を拝する事はできませんが、ここに謹んでこの頭髪を献上し、天子様への恋情を表わしますと、こう伝えておくれ。（丑が跪いて髪を受け取り、肩にかける介）貴妃様、御心配なさいますな。では、私め行って参ります。

「好い具合に一筋の黒髪によって、再び二人の永遠の愛を結ばん。」（退場）（旦が坐って哭く介）（老旦と貼が登場）

【榴花灯犯】【剔銀灯】【噂では、貴妃が君王にさからい、】【石榴花】【噂では、実家に帰されたそうな。】【普天楽】【噂では、よるべを失った兄国忠が憂慮し、噂では、その後に太監がやって来たそうな。一体どういう事だろう。】（進む介）貴妃様はどちら？（侍女）韓国虢国の二夫人がいらっしゃいました。（旦があいさつもせず、ただ泣く介をする）（老旦と貼が貴妃に会う介）（老旦）貴妃よ、どうかお嘆きにならずに。（共に泣く介）（貼）先頃、望春宮では、上様は殊の外お喜びだったのに、どうして急にこんなことに？【漁家傲】【私はただ、千万年も歓楽は尽きないと言っただけなのよ。】【尾犯序】【私はただ、あの方（天子）の意のままに任せると言っただけなのよ。】【石榴花】【私はただ、例え行き違いがあっても、あなた（楊貴妃）とは張り合わないと言っただけなのよ。】（老旦）裴の妹（虢国夫人）よ、【錦纏道】【繰り言を言うのはやめておくれ。貴妃よ、あなたが天子の怒りをかったのは、一体何が原因なの？】（旦が取り合わぬ介をする）（貼）貴妃よ、私の言うのをとがめないでおくれ。【剔銀灯】【もともと寵愛が深ければ仲違いも生じるもの。君恩とて秋の木の葉と同じ、時と共に枯れるものよ。あなたのこんな様子では、どうして天恩をお受けできましょう。】（老旦と合唱）【雁過声】【こうして実の姉妹がねんごろに慰問しているのに、あなたはどうして耳元の忠告が聞けないのよ？】（旦）

【尾声】【秋風が吹けば夏の扇子がいらなくなる様に、天子に棄てられるのは私の運命、血を分けた姉妹のご来訪を心から感謝します。私も言いたいことは山ほどありますが、今は胸に秘めておきますわ。】

（ついに退場）（貼）姉さん、妹の貴妃のこんな様子では、どうしたらよいでしょう。（老旦）ほんと。私達がわざわざ来たのに、彼女は何の考えがあるのか、とうとう奥へ行ってしまったわ。ねえ、妹よ、今度望春宮へ行く時

は、あなたは貴妃のまねはしないでよ。（貼が羞じる介）チェッ。

（貼）　今朝、忽ち妹が宮中を放逐されたが、　張籍
（老旦）　その妹に対面すれば、どうして悲しまずにおれよう。　廖匡図
（貼）　冷静に考えてみれば、本当におかしな話、　徐寅
（老旦）　中に刺（とげ）を含んで、人を刺そうとする。　陸亀蒙

注

（1）原文「天有不測風雲、人有旦夕禍福。」…人の禍福は天気の様に変化し、予測し難いこと。中国古代の習語。元曲『合同文字』第四折、『水滸伝』第二十六、一〇一回、『西遊記』第四十回、『紅楼夢』第十一回等に習見する。

（2）原文「貴妃忤旨、被謫出宮、命高内監単車送到門来。」…「太真外伝」巻上に「（天宝）五載七月、妃子以妬悍忤旨、乗単車、令高力士送還楊銛宅。」と。

（3）原文「烏鴉与喜鵲同行、吉凶事全然未保」…吉凶がごちゃまぜになって、区別がつかないこと。『警世通言』巻三〇、『二刻拍案驚奇』巻七等、明代小説中に習見する。また同様に、「青龍与白虎同行、吉凶事全然未保」の熟語も『三言二拍』等の小説中に習見する。

（4）紅雲…宮中にたなびく吉祥の紅い雲。『佩文韻府』「紅雲」に引く『異聖伝』に「玉帝所居、常有紅雲擁之」と。『驚鴻記』第十齣「紅雲」語の陳氏標註参照。

（5）原文「暗将懐旧意、報与失歓人」…元稹「鶯鶯伝」に「還将旧来意、憐取眼前人」と。

第九齣　復　召

【南呂引子】【虞美人】（生が登場）【わけもなく煩悶が湧き起るが、誰に訴えるすべも無い。この気持は自分でもやりきれ

ぬのに、何としたことか、鸚哥がしきりに朕に話しかける。】

「御成り道に春草が生え、上林苑の花は今が満開。高台に上ればやるせない思い。この気持は侍臣には分るまい。」寡人は昨日楊貴妃の嫉妬のせいで心中楽しまず、一時の失策で彼女を追い出してしまった。ところが佳人は得難いもの、彼女が去ってからは、眼に触れるものは全て憎らしく、どんな風景も全て恨めしい。あの楊国忠が謝罪に来たが、寡人とて会わせる顔が無い。（嘆く介）ああ、彼女を宮中に呼び戻そうにも口に出しにくいが、もしも彼女を呼び戻さなければ、朕はこれからどうしたものか。まことに決心がつかぬことだ。

【南呂過曲】【十様錦】【繡帯児】【春風は止み、宮簾が半ば開いている。春の日長は仲々過ごし難い。小鳥が楽しく囀るのを聞き、新しい花が美しく咲き競うのを見るにつけても、彼女を思って後悔する。】【宜春令】【悔まれるのは、自分の粗忽のために彼女の愛しさが分らず、あたら香玉の如き彼女の風情を台無しにしてしまったこと。】（副浄が内監に扮して登場）「玉盤に赤糸状の細切り肉が盛られ、金の甕が開かれて緑酒が薫る。[1]」（跪いて会う介）天子様、どうか御召し上り下さい。（生が応じない介）（副浄がまた勧める介）（生が怒る介）こらっ、誰がここに来いと言った。（副浄）天子様には朝から何も召し上らないので、後宮から御膳を上す様に申しつかりました。（生）ちっ、何が後宮だ。内侍を呼べ。（二人の内侍が応じて登場）（生）こやつを引っ立てて、百回の鞭たたきにし、牢屋[2]に入れよ。（内侍）かしこまりました。（共に副浄を連行して退場）（生）ああ、朕がここで貴妃を思っているのを、こやつに邪魔されてしまった。全く忌々しい。【降黄龍換頭】【彼女を思えば、たとえ天上の美酒や海外の珍味といえども、どれ程の味があろう。ただ愛しき人（貴妃）が眼の前にいてこそ、飢えが満たされるのだ。】（浄が内監に扮して登場）「酒樽が並ぶ美麗な宴席に歌舞を披露し、花咲く紅楼に管弦を奏でる。」（会って跪く介）天子様には、どうか沈香亭の宴席にて梨園の新楽を御鑑賞下さいます様に。（生）こらっ、何が沈香亭だ。ぶつぞ。（浄が叩頭する介）これは私めがした事ではなく、太子や諸王様が天子様の御機嫌斜めなるを見て、特に気散じをさせようとなされたのです。（生）ふん、朕のどこが御機嫌斜めなものか。内侍を呼べ。（内侍が応じて登場）（生）こやつを引っ立てて、百回の鞭たたきにし、薪小屋[3]に入れて、火の番をさせろ。（内侍）かしこまりました。（共に浄を連行して退場）（生）内侍よ、参れ。（内侍が応じて登場）お前ら二人に宮門の見張りを命じる。一人も入れるな。違えば厳罰に処する。（内侍）かしこまりました。（舞台の前に立つ介をする）（生）ああ、朕はこん

『長生殿』訳注（三）（竹村）

な時に、一体どんな気持で歌を聞き、酒を飲むことができよう。【酔太平】**【思えば沈香亭で、やはり玉の欄干に倚って、一体誰が新しく粧って共に寄り添ってくれたのか。**(4)**たとえ梨園の新曲があっても、音楽を知るその人**（楊貴妃）**はいないし、彼女の管弦の響きが絶えた今、朕の玉笛も吹くのがためらわれる。】**（丑が肩に髪を載せて登場）【浣渓紗】**【二人の別れは悲しく、思いはつのる。双方ともに思い煩っているとは誰が知ろう。私は傍から見て、そのからくりが分るので、鸞と鳳の様な二人が再び一緒に飛ぶ様にはからいたく思う。】**（内侍に会う介）天子様はどちらに？（内侍）独り宮中に坐しておいでです。（丑が入ろうとすると、内侍が遮る介）（丑）お前はどうして我が輩を邪魔だてするのだ？（内侍）天子様は大層お怒りになり、御膳を勧めに行った者を二人続けざまに鞭打たれ、私共に特に宮門を見張らせて、一人も入らせない様にしています。（丑）そういうことであれば、我が輩はしばらく待とう。（生）朕は無聊で仕方が無いので、ちょっと宮門外を散歩でもしよう。（行く介）**【一帯の玉階には春草が生えているのに、これを踏んで従う美人の裳（もすそ）や履は見えない。】**（丑が見やる介）天子様がお出になった。我が輩は門外に隠れて、機会を窺おう。（一旦退場し、すぐに登場して、聞き耳を立てる介）（生）寡人はここで貴妃を思っているのに、貴妃はどの様にして寡人を思っているだろうか。先刻高力士に尋ねたら、貴妃は宮中を出されて、涙も乾かぬ程泣き通しとの事であったが、朕の心は張り裂ける様だ。この半日というもの、彼女の消息を知るべくも無い。高力士の奴も、朕の前に姿を見せない。全く忌々しい奴だ。（丑が会う介）私めなら、ここにおります。（生が丑を見る介をする）（生）高力士、お前の肩にかけているのは何だ。（丑）楊貴妃様の御髪でございます。（生が笑う介）頭髪だと？（丑）貴妃様がおっしゃるには、自分の愚昧のために、天子の御心にさからい、その罪は万死に値します。今生において、自分は再び天顔を拝する事は無いでしょうから、特にこの頭髪を剪り取り、私めを通じて天子様に献上致し、以て変らぬ恋情を表わします、とのことでした。（髪を献上する介）（生が髪を手に取って見つめ、哭く介）ああ、我が貴妃よ。【啄木児】**【昨夜枕辺で嗅いだ髪の香りが、今朝は剪り取られて、愁いと共に寄せられた。つややかな黒髪を見れば、腸も千切れ、魂も消える思いがする。】**思えば、朕と貴妃との情愛が中断したのは、まるでこの髪の様だ。ばっさりと【金刀でもって剪られ、雲髻（もしどり）から別れてしまったこの髪よ。】（丑）天子様。【鮑老催】**【どうかお嘆きなさらずに。】**私めが思いますに、貴妃様は十分に恩寵を蒙っていますのに、天子様はどうして彼女の宮中の席位を惜しんで、外の世界へ追い出されたのでしょ

う。【春風が天空に吹き戻す様になれば、名花（貴妃）も御苑の外から宮中に移ることになりましょう。】（生が考え込む介をする）ただ、寡人は既に貴妃を追放したのに、どう召還したらよかろう。（丑）罪があれば追放し、反省すれば召還する、これこそ天の如き聖主の度量にございます。（生がうなずく介）（丑）まして、今朝貴妃を車一つで出したのは夜が明けたばかりの頃でしたが、今はもう日暮れ時です。安慶坊を開いて太華公主宅から宮中に入れば、[5]余人は誰も気付きません。（叩頭する介）【どうかお赦しをいただき、貴妃様の御帰還を賜ります様に。すみやかになされば、きっと天子様の愁いの城[6]も自ずから解けましょう。】（生）高力士、ではお前に貴妃を迎えに行ってもらおう。（丑）承知致しました。（退場）（生）ああ、貴妃が来た時に、寡人はどのように会えばよいだろうか。【下小楼】【玉人の帰還は嬉しいが、すねた彼女が顔を背けて泣くのが思いやられる。再会の時、どんな言葉で私の前非を繕えばよいのか。】ままよ、これも元は寡人の誤ち、【万般取りなしに努め、[7]半日の別離を償うことにしよう。】（丑が内侍、宮女と共に提灯を手にし、旦を連れて登場）【双声子】【宮車を曳き、宮車を曳き、宮中の槐樹の林を通り過ぎる。絹張りの灯籠が向き合い、絹張りの灯籠が向き合い、美しい宮花を照らし出す。】（内侍と宮女が退場）（丑が進み出て報告する介）楊貴妃様のお着きです。（生）早く通せ。（丑）かしこまりました。楊貴妃様、お召しです。（旦が進み出て会う介）私め楊氏、お目通り致します。このたびは誠に申し訳なく、死罪に値します。（うつむき伏す介）（生）楽にしなさい。（丑がそっと退場）（旦が跪き泣く介）私めは大変な無礼を働き、天子様のお怒りに触れました。いま再び聖顔に会うことができ、これで安心して死ねます。（生が共に泣く介）貴妃よ、どうしてそんな事を言う？（旦）【玉漏遅序】【思えば、私の罪は山の様に重いのに、天の如く寛大な天子様の御加護を蒙りました。今よりは自ら悔い改め、宮女の位階に従い、二度と他の美女を妬むことは致しません。】（生が旦を支え起す介）寡人も一時の誤りであった。以前のことは、もう触れまい。（旦が泣いて起つ介）ありがとうございます。（生が旦の手を取り、旦の涙を拭く介）

【尾声】【孤愁の味がよく分った今からは、[8]この情愛は十倍も深まるであろう。貴妃よ、朕はこの一日の思いを卿に語ろうぞ。】

（宮女が登場）西宮に宴席の用意ができました。天子様、貴妃様、どうぞお越し下さい。

『長生殿』訳注（三）（竹村）

（生）真情を吐露して、宴席の酒は樽に満ちている。　李中
（旦）私には、これ以上言うべき言葉もない。　羅隠
（生）慣れぬ別離に思いは尽きず、　蘇頲
（旦）再び寝所に入って、涙のあとを拭う。　柳公権

注

（1）原文「膾下玉盤紅縷細、酒開金甕緑醅濃」…唐・韓翃「宴楊駙馬山池」詩に「膾下玉盤紅縷細、酒開金甕緑醅濃」と（『全唐詩』巻二四五）。
（2）原文「浄軍所」…明代、太監を監禁した場所。『明史』巻一八六、樊瑩伝に「琮遂下獄、充浄軍。」と。
（3）原文「惜薪司」…明朝の内官四司の一。薪炭の職務を司る。
（4）原文「憑闌仍是玉闌干。問新粧有誰同倚」…李白「清平調詞」其三に「沈香亭北倚闌干」とあり、同じく其二に「問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新粧」と。
（5）原文「開了安慶坊、従太平宅而入」…『楊太真外伝』巻上に「力士因請就召、既夜、遂開安慶坊、従太華宅以入。」と。太華とは玄宗の第二十五女太平公主のこと。
（6）原文「愁城」…庾信「愁賦」に「攻許愁城終不破」と（許逸民『庾子山集注』附録佚文、中華書局、一九八〇年）。
（7）原文「親媚」…親信喜愛の意。司馬遷「報任少卿書」（『文選』巻四十一所収）に「以求親媚於主上」と。
（8）原文「従今識破愁滋味」…辛棄疾「丑奴兒」詞に「而今識盡愁滋味」と。

第十齣　疑　識

（外が郭子儀に扮し、頭巾をかぶり、剣を佩いて登場）「我が輩の壮志を誰が知ろう。身には護身の宝剣を佩き従える。この

剣で天下の邪悪を成敗して時局を救えば[1]、その時こそ我が輩が男児となる時。」我が輩は姓は郭、名は子儀、本籍は華州鄭県の人。六韜三略の兵法を修め、腹には天下を治める才略が満ちている。天下に並び立つ英雄男児になろうとすれば、国家安定の事業をやらねばならぬ。今、私は武挙出身の官吏として、京都で任命を待っている所である。折しも楊国忠が政権を弄断し、安禄山が天恩をほしいままにしており、みすみす朝廷の綱紀がずたずたになってしまいそうだ。この郭子儀の如き、まだ何の官職も得ていないが、いつかは必ず朝廷の為に尽くしたいものだ。

【商調集賢賓】【男児の本懐は自ら吐いて実行するもの、どうして空しく天に向って叫ぼう。笑うべきは、彼らこそ、堂間に巣くう燕みたいに身に迫る危険も知らず、また屋上に烏が集う家屋みたいに国の憂いも分らぬこと。今や天下大乱の時、突然檻を破って虎や熊が飛び出したり、村の鼠や町の狐が縦横に走り回ったりしている。私は、何度も朝早く鶏の声と共に起き出し、独り剣舞を舞って鍛錬に努めて来た。思えば古来の栄枯盛衰において、どれほどの英雄の功勲が天下に伝えられていることか。私とて、無名の樵夫（きこり）や漁師で一生を終えはしない。】

まずは長安の市街へ行って、酒でも飲むとしよう。

【逍遥楽】【都大路をゆっくり歩き、しばし憂さを晴らしつつ、旅宿のつれづれを慰める。俺の眼には、雑踏する人々が酔っぱらいの様にヨロヨロ歩くのが見えるが、この中のどこに独り醒めた屈原がいるというのだろう。この郭子儀は、大志を同じくする連れを探しているが、残念ながら釣り糸を垂れる太公望は去り、虎を射る李広将軍は遥か彼方、狗殺しの樊噲もいないのだ。】（退場）（丑が酒楼の給仕に扮して登場）

「我が酒楼は至って高級であり、看板には掛け売り一切お断わりとある。金さえ有ればいくらでも飲めるが、文無しならば水一滴も飲めぬ。」私はこの長安の町の新豊館大酒楼に勤める給仕です。この酒楼は東市、西市の中間にあって、人通りも賑やかです。凡そ都の内外の王孫公子、役人や町人、兵士や庶民など、この楼に来て一杯やらない者はいません。その酒も、酒だけ飲む者、肴と共に飲む者、酒を買って行く者、酒席の予約に来る者等、全く際限がありません。言いも終らぬうちに、又一人酒飲みがやって来ました。（外が歩いて登場）

【上京馬】【向うの画楼の隅に楊柳が斜めに垂れ、青色の酒旗が風にひらひら舞っている。どうかして燕市の酒客荆

軻と一杯やりたいもの。】（呼ぶ科）給仕、居るか。（丑が迎える科）お客様、二階へどうぞ。（外が二階へ上る科をする）仲々良い酒楼じゃの。**【広く開いた窓から入る穏やかな日差しと心地よい風。見れば、ぐるりの壁にはいずれも酔仙の絵が描かれている。】**

（丑）お客様、お一人ですか。それとも連れをお待ちで？（外）一人でしこたま飲もう。うまい酒があれば持って来い。（丑）ございますとも。（酒を持って登場する科）お酒でございます。（内で呼ぶ科）給仕、こっちに来てくれ。（丑が応じて、急いで退場）（外が酒を飲む科）

【梧葉児】【俺様は酒好きの暇人陶淵明でもなければ、酒で管を巻く愚かな灌夫でもない。ただ痛飲して愉快になりたいだけだ。この醒めた眼で見てみれば、誰がこの俺にかまってくれよう。果して酔郷は俺を入れてくれるか。こんなに賑やかな街の中、高陽の酒徒（酈食其）**たるこの俺も落ちぶれたものだ。】**（起って見る科をする）（老旦が内監に扮し、副浄・末・浄が官吏に扮して、それぞれお祝いの礼服を着用、雑が金封を捧げて、羊を引き、酒を担いで相次いで登場し、舞台を回って退場する）

（丑が酒を持って登場）お客様、熱燗をどうぞ。（外）給仕、ちと尋ねるが、酒楼の前のあの役人どもはどこへ行くのだ？（丑）お客様、お酒を召し上りながら、私の話をお聞き下さい。国舅たる楊（国忠）丞相殿、及び韓国・虢国・秦国の三夫人に対して、天子様がそれぞれ新邸を賜ったのです。宣陽里には、この四家の豪邸が軒を連ね、どれも宮中とそっくりの構え。こちらの造作はあちらより大きくしようとし、あちらの建築はこちらに勝とうとします。あちらの方が立派に出来ると、こちらは取り壊して新しく作り直し、どちらかの家と同じ規模の作りになって、やっと工事を止めるという具合です。大堂一つに、何千万貫銭もの費用がかかるとか。今日はその工事が竣工したので、朝廷中の大小の役人が羊や酒の礼物を用意して、各家にお祝いに出かけようとして、ここを通って行くのです。（外が驚く科）おお、そんな事が。（丑）もう一本熱い酒を持って参りましょう。（退場）（外が嘆く科）やあ、外戚が恩寵をほしいままにし、こんな地位にまで上るとは、一体どうしたものか。

【醋葫蘆】【奇怪なのは、私人がこれ程までにのさばり、豪奢な建築を競い合っていること。宮中の公卿百官は甘んじて彼らに遜り、争って権門に取り入ろうとして群がり集まる。もはや一人も朝廷に実情を上訴する者もいない。あの新築の家の赤や青の瓦も、もともとは人民の膏血で塗られているのだ。】（起つ科）

心中にカッと怒りが湧き、覚えず飲んだ酒が上って来る。どれ、四方の壁をゆっくり見てみよう。（見る科をする）こちらの壁には細字が数行、誰か詩句を書きつけている。ちょっと見てみよう。（見て読む科をする）「燕京から人は皆いなくなり、函谷関の馬は帰って来ない。もし山麓で幽霊に出逢うならば、その幽霊は玉環に薄絹を結んでいるであろう。」　やあ、この詩は奇妙だな。

【幺篇】俺はここで、【この詩をじっと見つめ、始めから一句ずつ読んでみる。よく味わってみると、詩意は吉事ではなさそうだ。】 さて、誰が書いたものか見てみよう。（又見て読む科）李遐周題す。（考える科をする）李遐周、この名前はよく知っているぞ。おお、そうだ。術士の李遐周というのが人の過去や未来を言い当てると聞いたが、きっと彼のことであろう。多分、**【この詩中に予言が蔵されているのだろうが、謎解き名人の杜大伯がどこにいようか。まさか、彼が酔っぱらって壁上に殴り書きしたのではあるまい。】**（内で騒ぐ科をする）

（外が呼ぶ科）給仕はどこだ。（丑が登場）お客様、何の御用で？　（外）階下はどうしてこんなに騒々しいのか。（丑）お客様、この窓から下をご覧になれば、すぐに分ります。（外が見る科）（浄が王服を着て馬に乗り、儀仗兵の先導で登場し、舞台を回って退場する科）（外）あれは何者だ？　（丑が笑って指さす科）お客様、彼のでん腹を見ませんでした？　彼は姓は安、名は禄山。天子様は彼をいたく寵愛され、玉座の金鶏の屏風の前に彼が坐るのを許された程です。今日は更に彼を東平郡王に封じられました。それで、彼は今し方、天恩に謝する為に宮中に上り、東華門外の新邸に帰るのに、ここを通って行く所です。（外が驚き怒る科）やあ、こ、こやつが安禄山か。彼奴は何の功績があって遽かに王爵を手にしたのか。おお、こやつの面構えには謀反の相が表れている。天下を乱すのは、この者に違いない。[2]

【金菊香】【この粗野な羊飼いの下種野郎は、蜂のような眼、豺のような声からして、きっと悪賢い奴だ。どうしてこんな狼野郎を屋内に引き込んでしまったのか。あの題壁詩に符号してはいないか。更に、奴があの外戚どもとつるんで、狐妖の如き悪行を働くのではないかと恐れる。】

（丑）お客様、何をそんなにお悩みですか。（外）

【柳葉児】ああ、思わず**【ぞっとして頭髪が逆立ち、怒りが胸に沸拂と湧いて来て、ゴトンゴトンと鳴る腰の宝剣**

を頻りに見る。】（丑）お客様、どうかお怒りにならずに、もう一本開けて下さい。（外）やあ、【千杯傾けようと、百本飲み干そうと、どうしてこの沈鬱な愁いを消すことができよう。】（身を起す科をする）

酒はもういい。この酒代を取っておけ。（丑が収める科をする）他人は「酒三杯で万事和らぐ」のに、このお客さんは「酒で一気に怒って千愁を惹き起こす。」[3]（退場）（外が階下に下り、舞台を巡って行く科）まずは宿に帰ろうか。

【浪来裏】【あの心痛める出来事に遭遇し、あの時勢に感じた予言詩に出会った事からすれば、天心と人意には両つとも測り難いものがあって、この俺を深く考え込ませ、眉をぴくぴく顰めさせる。見れば、地面に夕日が落ちて日暮れ時、侘しい旅館に帰ろうとすれば、やはり気もそぞろ。】（旅館に着き、入って坐る科をする）

（副浄が家主に扮して登場）（会う科）申し上げます。邸報が来ております。（外が読む科）「兵部から一通、官員を除するの儀。聖旨を仰ぎ、郭子儀に天徳軍使を授ける。此を欽（つつし）め。」そうか、聖断が既に下ったからには、早く荷物をまとめ、すぐに赴任しなければ。（副浄が応ずる科）（外）この郭子儀の官職は低くても、これから朝廷に忠勤を尽くすのだ。

【高過随調殺】【本当に今までの俺は、龍が少しの水の中で身体を伸ばし、鳳が荆棘の中で羽を伸ばす様であった。俺はこれで大空へ羽ばたき、天上へ上る名分ができたのが嬉しい。必ずや天下の乱れを正し、千年に一番の功業をあげてみせる。たとえ妖気や毒虫がいようと、俺は国家の重責を荷ない、この手で大唐帝国を支えるのだ。】

閑職にある私の馬は、何年も空しく塵を踏み、　　胡宿
いつも豪貴の者が要職を独占するのみ。　　司空図
卑小な閑職は、宮中の権貴とは自ずから隔たるが、　　王建
しかし、真に国を憂える人士は一体誰だろうか。　　呂温

注

（1）原文「整頓乾坤済時了」…杜甫「洗兵行」詩に「二三豪俊為時出、整頓乾坤済時了」と。

（2）原文「這斯面有反相、乱天下者必此人也」…『大唐新語』巻一に「（九齢）因奏曰、『禄山狼子野心、面有逆相。』」とある。新・旧『唐書』張九齢伝、『資治通鑑』巻二一四の記事も略ぼ同じ。また『梧桐雨』楔子に「（安禄山）有許多異相、若留此人、必乱天下。」とある。

（3）原文「三杯和万事、一気惹千愁」…『元曲選』所収武漢臣『生金閣』三折に「可不道三杯和万事、一醉解千愁」と。

第十一齣　聞　楽

【南呂引子】【歩蟾宮】（老旦が嫦娥に扮し、仙女を連れて登場）**【清かな光が月夜を独占し、幾万年を経て微塵も汚れない。天空の風や霧が銀白の月に向ってなびく中、一すじの仙楽の音が微かに響いて来る。】**

「長生の仙薬を搗く月の宮殿は俗塵を遠く離れ、そこに住む私はもともと清浄で艶麗。折しも雲中から桂の花びらが降ってきたので、蒼く茂った桂の木に近寄ってみる。」私は嫦娥、本来は月宮の主なのですが、俗に后羿の妻とも言われています。七宝から成る真ん丸の月は三万六千年を経ており、その清らかな光は千二百里の彼方まで照します。月に住む白兎や蝦蟆は永遠の至宝を産み続け、月に生える白楡[1]や丹桂には世にも珍しい花が咲きます。月には以前から「霓裳羽衣」という仙楽がありますが、長く月宮に秘したままで、人界には伝わっていません。今、下界の唐の天子は音楽を善くする知音の士であり、その妃楊玉環の前世は蓬来宮の玉妃であって[2]、ここにも来たことがあります。では、その貴妃の夢魂を召し出して、この仙曲を再び聞かせましょう。彼女が醒めた後、記憶によって管弦の楽器に記録すれば、天上の仙曲が人間世界に伝わることになり、何とすばらしいではありませんか。寒簧よ、来なさい。（貼）はい。（老旦）お前は大唐の宮殿に行って、楊玉環の夢魂をここまで案内して、この曲を聴かせるのです。仙曲が終れば、元の通りに送り帰しなさい。（貼）かしこまりました。（老旦）「ままよ、遊仙の夢枕によって、千年も秘した天上の法曲をひそかに彼女に授けよう。」（従者を連れて退場）（貼）天妃様の命を奉じ、私は今から月宮を出て、大唐の宮殿に行って参ります。（行く介）

『長生殿』訳注（三）（竹村）

【南呂過曲】【梁州序犯】【本調】【天の河が斜めに輝き、星々が微かに煌めく中、俗界を遥かに見下す。濛濛たる靄が立ち込める中、早や荘厳なる月の宮殿を離れれば、環佩が風に任せて揺れ、衣服が朝霞にきらめきながら、私は紅い雲の絨毯の上を歩く。私は天上の秘楽を宮女（楊玉環）に伝授するため、密かにその夢魂を召し出して月の宮殿に案内する。】早や大唐の宮殿に着きました。【賀新郎】ほら、【門は閉じられ、寝所には帷が下り、あの楊貴妃は海棠の様に艶やかに熟睡している。】【本序尾】【涼しい竹枕を抱いて眠る彼女を、そっと呼び起す。】

（呼ぶ介）楊貴妃様、お起き下さい。（旦が夢魂に扮して登場）

【漁灯児】【今し方、夕涼み後、陛下との睦み事。すっかり熟睡すれば、お化粧も滲んでべとべと。】（貼）貴妃様、どうぞ。（旦）おや、奥深い宮殿の軒先で誰か呼んでいる。【しかし、この軒先まで報せに来る宮女はいないはずだが。】（貼）貴妃様、どうぞお早く。（旦がだるい様子で欠伸をする介）【私は朦朧として嬌やかに欠伸をし、ゆっくりと起きて、カーテンを開ける。】

（出て貼に会う介をする）あら、やっぱり宮女だわ。（貼）

【前腔】【私は長門宮で人の嫌がる掃除をする宮女ではありません。】（旦）宮女でないとすると、別院のお妃ですか。（貼）【私は御座に侍る昭容妃でもありません。】（旦）それでは、あなたは一体？（貼）私は月の御殿に仕える寒簧と申すもの。【私の名藉は月の宮殿にあるのです。】（旦が驚く介）さては月中の仙女でしたか。どうしてこちらへ？

（貼）今し方【嫦娥様の勅命を奉じて、貴妃様を桂宮の花下の避暑にご案内に参ったのです。】

（旦）おお、そんな事が！（貼）貴妃様、ためらう事はありません。私が案内しますので、御一緒しましょう。

（旦を連れて行く介）（合唱）

【錦漁灯】【天空を指させば、足元に白雲がじわじわと湧く。青空を歩めば、耳にさわさわ風の音。ふと見れば、諸星が低く垂れて手で摘めるほど。向うの方に、きらきら輝く宮殿が鏡の様な月の中に鎮座するのが見える。】

（旦）おや、真夏なのに、どうしてこう寒いの？（貼）ここは月の宮殿でして、下界でいう広寒宮[3]なのです。どうぞお入り下さい。（旦が喜ぶ介）私みたいな汚れた凡人が、今夜は月の宮殿に来る事が出来て、何という幸せ。

（中に入って見る介をする）

【錦上花】【月世界を清遊して、心は頗る満足。】（考える介）これらの風景は、どうも以前に見た事がある様だ。【玉階を廻り、碧い軒を巡って、ぼんやりとその風景を思い出そうとする。】あちらには桂花がこんなに早く咲いている。（貼）これは月中の丹桂というもので、年中茂り、花も葉もよく香ります。（旦が見る介）なるほど素晴らしい花だわ。【見飽きない美しさに、更に嬉しくなる。桂樹は金色の花が枝先に綻び、緑の葉がそれに付いている。得も言えぬ良い香りが薄絹の衣服に染み透る中、私は桂樹の蔭を密やかに歩く。】

（内で音楽を奏する介）（旦）あら、あの仙女の一隊は、白衣に紅い裳で、桂樹の下を演奏しながらやって来る。何と素晴らしい音色でしょう。（貼）これが「霓裳羽衣曲」でございます。（雑が四人、六人、八人の仙女に扮し、白衣・紅い裳・錦のショール・ネックレス・リボンのいでたちで、それぞれ音楽を演奏したり、唱ったりして、舞台を廻って登場する介）（旦と貼が傍に立って見る介）（衆）

【錦中拍】【仙女が天上の音楽を花むらで演奏すれば、霓の裳が露にしっとり濡れる。ここは俗界を遠く離れて、月の宮殿に清光がそそぐ所。仙女が思いきり楽器を吹いたり弾いたりすれば、白い手もリズムを添える。楊貴妃の俗界の夢魔は醒めないまま、天宮の時間が過ぎてゆく。彼女が一夜の夢で仙界に遊び、霓裳羽衣曲が終りになる頃、この知音の人に繰り返しておさらいする。】

（共に退場）（旦）何と素晴しい音楽だこと。その清らかで高雅な響きは、私の心の奥底まで揺さぶる。全く俗界のものとは違います。

【錦後拍】【ぼんやりと霞む中に群れ集う仙女の姿はどこかで見たようだ。清らかな音楽を聞いて心は満ち足りる。その珠玉の響きを一々数えあげ、その珠玉の響きを一々数えあげ、その歌詞を一句ずつ、靴を軽く踏んで確認し、曲調に合せて指先で暗記する。赤面して羞じ入るのは、今まで自分の歌舞がまんざらでもないと自負していた事。この天界の音楽に較べれば、全く及びもつかないことだ。】

仙女様にお聞きします。月主の嫦娥様に会いたいのですが。（貼）嫦娥様にお会いするのは、まだ時期が早いでしょう。空が明るくなりました。貴妃様、どうぞ大唐の宮殿へお帰り下さい。

【尾声】【貴妃様には月へと上る道筋を覚えておかれます様に。（旦）幸いにも天界の新曲をすっかり覚える事ができ

ました。（貼）ただあなたの誤ちは、同床の君王を半夜放っておいた事です。】（旦が退場）

（貼）楊貴妃様が唐の宮殿に帰られたので、私は月主嫦娥様にこの事を申し上げましょう。

碧い瓦や桐の軒（ひさし）の月の宮殿が開かれ、　曹唐
またも明月の下に、君の帰るを送る。　丁仙芝
天上の音楽は俗人に聴く事を許されたが、　李商隠
その俗人は、俗界の時間に急（せ）かされて帰ってゆく。　黄滔

注

（1）白楡…『楽府詩集』巻三十七「隴西行」に「天上何所有、歴歴種白楡」と。

（2）原文「他妃子楊玉環、前身原是蓬萊玉妃」…陳鴻「長恨歌伝」に「又旁求四虚上下、〜跨蓬壺、〜西廂下有洞戸、〜署曰『玉妃太真院』」と。『楊太真外伝』ほぼ同じ。その他、『太平広記』巻二十所引「仙伝拾遺」、宋・劉斧『青瑣高議』前集巻六所収秦醇「温泉記」にも同様の記事がある。

（3）広寒宮…擬柳宗元『龍城録』に「明皇夢遊広寒宮」の一節がある。